

中国海軍は海南島方面の航空戦力を強化

漢和防務評論 20190107(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国海軍は海南島方面の航空戦力を強化しています。
従来の戦闘爆撃機 JH-7A を淘汰し艦船攻撃能力を付与した多用途戦闘機 J-16 に更新しようとしています。
海南島の楽東基地はグーグルの衛星写真で見ると、洞窟格納庫が見えます。また加萊基地周辺には多くのデコイが配置されています。



海南島楽東基地 (Google Earth)



海南島加萊基地 (Google Earth)

KDR 東京特電：

海軍航空第 9 師団の戦闘機部隊が所在する海南島楽東基地に、瀋陽で生産された双発戦闘機（スホーイ）が発見された。この機体は J-16 戦闘機かどうか注目しなければならない。遠距離から見たのでは、これらの機体が J-11BS なのか J-16 なのか正確に判別することはできない。

加菜基地（海軍航空第 8 師団が所在）には数年前、J-11B/BS の配備が開始された。各種情報を総合すると、海軍航空第 9 師団に J-16 の配備が開始された可能性がある。

KDR は数年前、権威筋から南海艦隊が率先して J-16 を獲得しようとしているとの情報を得た。

J-16 は、海軍と空軍が共同投資した多用途戦闘機であり、SU-27UBK と SU-30MKK を基礎にして開発した機体である。また SU-30MK2 と SU-27UBK を基礎にして J-16H 型を開発した。この 2 種の J-16 型は、いずれも WS-10A エンジンと AESA レーダーを搭載しているようだ。（後者は未確認）SU-30MKK 及び MK2 の改修目的は同じである。

すなわち海軍向けの J-16 はレーダーを改修し海上搜索能力、対海上目標攻撃能力を付与した。

KDR は、多用途戦闘機 J-16 は、PL-15 及び PL-10、PL12 空対空ミサイルも搭載できると考えている。

J-16H は、当然現用の空対艦ミサイルを使用することができる。J-16H は、従来の戦闘爆撃機 JH-7A に比べると、胴体が大型化し、ロシア製 KH-31 シリーズを模倣して開発した YJ-12 空対艦ミサイルを搭載できる。現在 YJ-12 は、爆撃機 H-6M にも搭載している。

またロシアは、CLUB-N 艦対艦ミサイルを基礎にして 3M-54AE 型空対艦ミサイルを開発した。

したがって理論上、今後中国は、YJ-18 を基礎にして、空対艦型ミサイルを開発する可能性がある。

J-16H の生産開始は、今後 JH-7A が逐次淘汰されることを意味する。JH-7A は今後生産されないであろう。そして JH-7B の開発もないであろう。海軍航空部隊は JH-7A を完全に放棄したように見える。確かに国際的に見ても、戦闘爆撃機（FIGHTER BOMBER）を開発する国は見られない。

ある説によると、J-16 が装備しているのは AESA レーダーであるという。開発時期から見るとその可能性はある。このことは、J-16 が米軍の最近改修された F-15SE に相当することを意味する。すでに出現した J-16 の写真を見ると、最新設計の各種電子戦、偵察、妨害用ポッドがあった。このことは対地攻撃時に電子妨害が強化されることを意味する。

ロシア海空軍もまた同時に SU-30SM の配備を開始した。これはロシア版の SU-30MK である。この機体は、BARS パッシブ型フェーズド・アレイ・レーダーを含め、全てロシア製の機器を採用している。これは主としてコストを節減するためである。MIG-35 と SU-57 は AESA レーダーを装備している。

現在、J-16 を装備している空軍部隊は 4 個である。それらは航空兵第 3 師団、航空兵第 14 師団であり、滄洲基地、鼎新基地にも少数の訓練部隊用 J-16 がある。航空兵第 33 師団はすでに J-16 に換装されたであろうか？確認が待たれる。しかも全ての旅団が J-16 を完全に充足しているかどうか(完全充足数は 30 機)、さらに分析する必要がある。

今のところ、少量生産されているスホーイ型を模倣した戦闘機は、J-11B の他は J-16 である。瀋陽航空機会社の生産数から見ると、過去 5 年間の J-16 の生産機数は多くない。約 2 年間で 1 個旅団分の J-16 を生産していると思われるが、これは楽観的な推計である。

このように見ると、2012 年から計算すると、2018 年までの 7 年間で 100 機前後の J-16 を生産した可能性があるが、実際の生産機数はこれよりも少ない可能性もある。

SU-27UBK と SU-30MKK/MK2 を基礎に開発された J-16 の最大の特徴は、約 12 個のハードポイントがあり、8 トンに及ぶ外装物を搭載できることである。J-16 は、すべて中国製の WS-10A エンジンを搭載している。このことは中国空軍がその性能を受け入れたことを意味する。現在のレーダー系統は良好である可能性がある。

KDR は、J-20、J-16 の AESA レーダー技術が、例えば進行波管やアンテナ等が汎用技術を採用しているように思う。

以下は、瀋陽航空機会社の生産能力を参考までに簡単に列挙したものである。
*2011 年、工場の駐機場に 27 機の双発戦闘機が出現した。それらの半分以上が J-11B/BS であった。

*2012 年 11 月、スホーイシリーズ戦闘機がただ 1 機だけ野外係留されていた。同機は海軍用の塗装であった。

*2013 年 10 月、野外に 9 機のスホーイシリーズ戦闘機が係留され、内 1 機が J-15 で、その他が J-16 であったか可能性がある。

*2014 年 1 月、野外に 13 機のスホーイシリーズ戦闘機があった。

*2015 年 10 月、野外に 9 機のスホーイシリーズ戦闘機があった。

*2016 年 11 月、野外に 17 機のスホーイシリーズ戦闘機があった。これと同時に 10 個の格納庫が新たに建設された。

*2017 年 11 月、野外の 9 機のスホーイシリーズの戦闘機があった。12 月に 4 機残っていた。

もし生産能力が正常だとするならば、2011年の生産機数は相当多いことに注目しなければならない。

以上